

教育・情報 No.11

Educational information

【特集】

02. 地域と学校の連携・協働の推進

文部科学省生涯学習政策局社会教育課 地域学校協働推進室長 西川 由香

04. 地域全体で子どもを育てるまちへ

宮城県川崎町教育委員会教育長 大沼 吉明

06. 地域の小学生と交流する大学生

— 学び、遊び、歌い、笑い、そして涙するとき —
尚絅学院大学教授 田村 嘉勝

08. クローズアップ! 教育の現場

社会教育主事資格を活かした学校経営
新潟県阿賀野市立安野小学校校長 相澤 祐助

特集

学校と地域連携

本資料は、「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

地域と学校の 連携・協働の推進

文部科学省生涯学習政策局社会教育課
地域学校協働推進室長
西川 由香

なぜ今、地域と学校の 連携・協働が必要か

昨今、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等による地域の教育力の低下や家庭教育の充実の必要性が指摘される一方、学校現場が抱える課題は複雑化・困難化しており、教員の働き方改革も叫ばれる中、地域の子供の育ちには、学校や家庭だけでなく、社会総がかりで対応することが求められている。

また、平成29年3月に告示された次期学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」が重視され、地域の人的・物的資源を活用した「生きた教育」により、予測不可能な未来社会の担い手となる子供たちに、実社会に裏打ちされた幅広い知識・能力を育成することが目指されている。

こうした中、中央教育審議会答申(平成27年12月)や「次世代の学校・地域」創生プラン(平成28年1月)も踏まえて社会教育法が改正(平成29年4月施行)され、地域と学校が連携・協働して、幅広い地域住民等の参画により、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進するため、教育委員会が地域と



学校との連携協力体制を整備することや、地域学校協働活動に関し地域住民等と学校との情報共有や助言等を行う「地域学校協働活動推進員」の委嘱に関する規定の整備が行われた。

これを受けて、文部科学省では、教育委員会において地域学校協働活動を円滑に実施するための参考の手引となるよう「地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン」を作成し、併せて、「地域学校協働活動推進事業」(平成30年度予算額約60億円)により、各地域の様々な取組を支援している。

「学校支援活動」から 「地域学校協働活動」へ

地域学校協働活動とは、地域の大人や学生、保護者、PTA、NPO、民間企業・団体など幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が対等なパートナーとして連携・協働して行う様々な活動である。

これまでにも、平成20年度から文部科学省が推進してきた「学校支援地域本部」等の取組を中心に、約1万校近くの小・中学校等において、主として地域住民が学校活動を支援する様々な活動が行われてきた。

一方、従来の取組については、個別の活動(例えば、登下校時の見守り、放課後の学習・体験活動、学校行事の支援など)間の連携不足や、特定の個人への依存による持続可能性の欠如などの課題もあったことから、今回の法律改正では、①コーディネート機能の強化、②より多くの地域住民等の参画による多様な活動の実施、③活動の継続的・安定的実施の3つの要素を持つ基盤として、各地域の取組を「学校支援地域本部」から「地域学校協働本部」へ発展させた上で、地域が学校を「支援」す

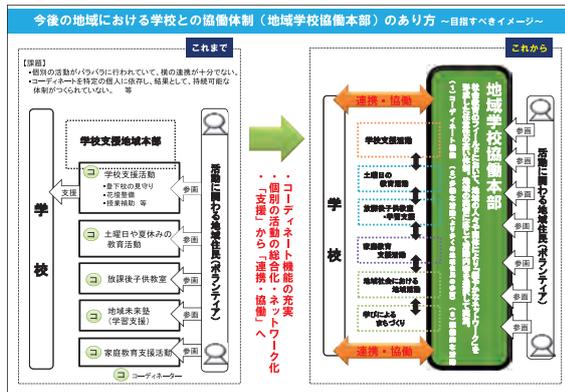


図1 地域学校協働本部のあり方イメージ

るといふ一方向的な活動から、地域と学校が目標を共有して行う「連携・協働」型の活動となることが目指されている。

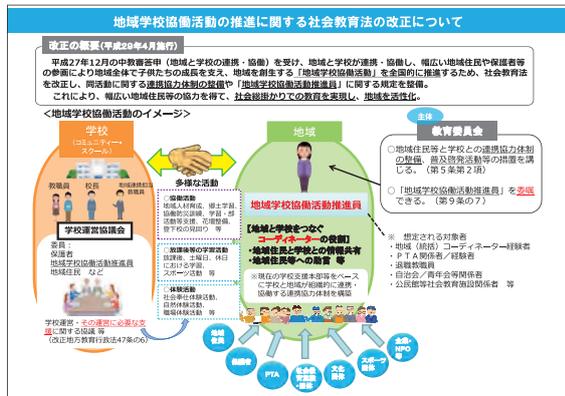


図2 社会教育法改正の概要

従来の学校支援にとどまらない、地域と協働した活動としては、例えば、子供たちが地域に出て、郷土について地域住民と直接触れ合っただけで学ぶ活動を行ったり、地域住民とともに地域課題の解決に取り組んだり、地域行事に子供たちが企画段階から参画して大人と一緒に地域づくりに関わったりするなど、「学校を核とした地域づくり」につながる活動が期待される。

コーディネーター役となる「地域学校協働活動推進員」の重要性

地域学校協働活動の推進にあたっては、活動に参画する地域ボランティアの方々に加え、地域住民間や学校関係者との連絡調整や活動内容の企画等を担う、コーディネーターとしての「地域学校協働活動推進員」の役割が非常に重要である。

地域学校協働活動推進員は、社会教育法第9条の7において、教育委員会の施策に協力して、地域と学校との情報共有や地域住民等への助言などを行うものとされている。そのため、望まれる資質・能力としては、例えば「地域学校協働活動の推進に熱意と識見を要する」、「地域学校協働活動への深い関心と理解がある」、「地域の住民、団体、機関等の関係者をよく理解している」、「学校の実情や教育方針に理解がある」、「コミュニケーション能力やファシリテート能力がある」といったことが挙げられるが、各教育委員会が地域や学校の特色や実情に応じて、必要な資質・能力を明確にし、適切な人材を確保していくことが望まれる。

併せて、既に各地で学校支援等の「地域コーディネーター」として活躍されている多くの地域の方々が、まずは社会教育法上の「推進員」として教育委員会より改めて委嘱され、各人の立場や役割・責任等が明確になることが重要であると考えており、文部科学省では、「地域学校協働活動推進員の委嘱のための参考手引」を策定しつつ、各教育委員会に対する支援や情報提供に努めている。

政府としては、こうした地域学校協働活動が全国的に行われるよう、様々な機会やツールを使って普及啓発等の推進を行っていく所存であり、地域の皆様におかれても、御自身のこれまでの経験や、様々な学習の成果を發揮する場として、まずは、身近な地域で行われている地域学校協働活動への積極的な御参加をお願いしたい。

(参考) 文部科学省「学校と地域でつくる学びの未来」ウェブサイト
<http://manabi-mirai.mext.go.jp/>
 ※地域学校協働活動の推進に向けたガイドラインや参考事例集、取組事例動画なども参照できますので積極的に活用ください。

著者プロフィール



● 西川 由香 (にしかわ ゆか)

文部科学省生涯学習政策局社会教育課
 地域学校協働推進室長

平成11年東京大学経済学部卒業、文部省入省。平成14年6月UCLA公共政策大学院修士課程修了。国立大学評価、世界文化遺産、東京2020オリンピック・パラリンピック招致、「トビタテ! 留学JAPAN」担当等を経て、平成29年7月より現職。小4・小1の2女の母として、地域の教育力に頼りつつ子育てにも邁進中。

地域全体で子どもを 育てるまちへ

宮城県川崎町教育委員会教育長
大沼 吉朗

我が町宮城県川崎町は県の南、蔵王連峰のふもと、仙台市と山形市の間に位置しています。四方は山々に囲まれ自然が豊かであることは勿論ですが、東北初の国営公園「みちのく杜の湖畔公園」があり、町のセントメリースキー場があり、釜房ダムがあり、江戸時代より伊達家の湯殿で、その後芥川龍之介等多くの文人が逗留した青根温泉があり、2つのインターチェンジを伴う山形自動車道があり、手つかずの城跡がある、水と森と歴史の町です。

当地も少子高齢化は避けがたい課題ですが、小学校が4校、中学校が2校あり、高校と支援高等学校があります。

私の町での教育の重点施策は、地域の施設・素材、人材を生かした郷土愛の教育です。

ふるさととは

多くの大人はふるさとをもち、特にふるさとを離れた大人は、時折ふるさとに想いをよせながら、哀愁や懐かしさなどを感じて暮らしていると思います。ふるさととは幼少時代に自分をつくりだした場所であり、人生の礎を育んだ時間空間そのものです。それ故、アイデンティティーの形成はふるさとでの原体験が関係あるのです。

幼少時代、子どもたちは、ふるさとでの人や自然との関係による「原体験」を自分の中に取り組み、その「体験」(主観)を「経験」(客観)に変換するのです。変換の手段となるのは、「振り返り」「指摘」「失敗や成功」「悔しさや嬉しさ」「感激」等さまざまです。そして、さらに多様な「経験」を積み重ねて記憶され、感性や思考力等の基礎が芽生え、次第に人としての幅が広がり、アイデンティティーの礎をつくり出すと考えます。

そのふるさとでの「原体験」を生み出す一つとして地域素材を利用した学習にあると思います。

地域素材を利用した学校教育

前述したように町には、釜房ダムやスキー場、国営

公園などがあり、それらに関連した学習を進めています。釜房ダムでは、小学生はダム見学と学習があり、地元ならではの勉強をします。日頃見ているダムの働きを知り、水の大切さを思い、自然の豊かさに感謝することを学びます。また、スキー場では、小学一年生からそり滑りやスキーを6年間学習します。スキーヤーを目指す子も出ています。国営みちのく杜の湖畔公園は広い敷地できれいな花々が四季を彩っていますが、遠足や学習に利用されています。年間80万人ほどの利用者がいて、充実した施設です。

町の一番の特色は、「支倉郷土文化伝承館」があり、全小中学生が年一度、支倉常長祭りに参加していることです。支倉常長は幼少時代を川崎町支倉地区で過ごし、伊達政宗公の命を受け、メキシコ・スペイン・ローマに航海して帰国しました。慶長遣欧使節の目的は歴史的に壮大なものだっただけと思いますが、帰国後、常長は謹慎を申し渡され悲運の晩年を過ごして亡くなったようです。

子どもたちには支倉常長についての学習や彼の夢などを想起させています。時代の歯車が違っていただければ、日本史に残る英雄だったと思いますが、彼の偉業は川崎町では伝わっています。彼の志を通して、「世界へ」「未来へ」に羽ばたく子どもたちを育てたく、郷土愛とともに世界・未来に立ち向かう教育も目指しています。



小中学生も参加する支倉常長祭り

尚絅学院大学との連携

郷土愛を育むものは、静的な環境だけでなく動的な環境、つまり人が重要であることは言うまでもありません。人との出会いや交流が大切で、子どもにとって、親、教師、友だち、すべての人が郷土愛には重要なファクターです。

昨年、川崎町小山修作町長と尚絅学院大学合田隆史学長が「包括的連携に関する協定」を結び、町と大学がまちづくりをはじめ様々な分野で協力し合うことにな

りました。尚絅学院大学は名取市にあり、川崎町と大学はおよそ20km離れていますが、町にとって一番近い大学です。この協定によって、町と大学は教育関係の分野でも関係を結ぶことになりました。

まだ1年も経過していないので大きな事業はできていませんが、教育委員会関係では、小学校で「サマーセカンドスクール」という、夏休みに子どもたちの学習や運動、遊びなどの活動を学生と3日間行いました。このような交流の他に、町民と大学との交流も生まれつつあり、大学の講師派遣や、町民の大学見学や大学での講義参加などいろいろな機会が設定されています。

この交流が町にとって素晴らしいのは、川崎町の支倉常長祭りに大学の吹奏楽部や合唱部、踊りの愛好会などがステージに立ち、町民に喜ばれ、盛り上がるの祭りになったことでした。大学との交流を教育という場面で考えているところです。



支倉常長祭りで尚絅学院大生が演奏

公民館やB&Gを利用した社会教育

町には多くのスポーツ団体があり、老若男女スポーツに励んでいます。団体は、子どもたちのスポーツ育成にも力を入れています。スポ少の加入率はとても高くなって、これも指導者の方々が脈々と繋がり組織が壊れずに続いているからです。

スポ少の他に、B & Gが主催している川崎町スポーツ教室「運動笑学校」総合型スポーツクラブがあり、幼児から成年まで年代別に年間プログラムがあり、水泳やスキー、体操、ヨガ、球技、親子運動教室など時期に応じたスポーツをしています。何よりも幼児期から参加ができることでスポーツに慣れ親しむ講座として適切です。

公民館は、青少年事業として、ジュニアリーダークの育成があります。中高校生が任意加入し、町の行事等で活躍します。学校の授業以外の学習は、中高生にとって貴重な体験です。その他にも、青少年向け、小学生向けの講座や研修があります。

子供会育成会では、各地区で様々な行事を企画し、活動しています。中でも町内大会の親子バレーボール大会は毎年盛り上がっています。地区ごとに練習をして親子チームで大会に臨みます。親子の絆や地区内の結びつきが一層強くなる機会の一つです。

ふるさと教育は

ふるさと教育は、人的・物的な環境を利活用しながら、子どもに郷土愛を根付かせることです。ただ、単なる郷土という範囲ではなく、今や郷土からグローバルな社会にも開かれた郷土愛をもつ郷土です。そして、郷土愛は、他の地域との比較や優劣ではなく、郷土の良さや強さ、ユニークさを知り尽くし、郷土独特の志を育てることではないかと考えます。

我が町の川崎中学校では、「川崎魂」という言葉をスローガンにしています。「川崎魂」とは何かと考えると、川崎の風土自然文化で培われた漠然とした精神であり、端的な言い方では“忍耐強くがんばろう”といった意味合いも含むかと思えます。川崎という地域独特の、表現しきれない心情や精神があるのだと思えます。

「地域全体で子どもを育てる」という主題をまとめると、学校教育や社会教育、地域社会などいろいろな組織が機能し、ふるさとの良さや強さ、独自性を感じながら、私たちは子どものより良い成長を図ることが最終的には重要であると考えます。そのためにも地域全体が、子どもの安全に留意して子どもの命を守り、日々の挨拶などで子どもと関わり、学習やスポーツで繋がり、親子の絆以外にも多くの絆が子どもにできるようにすることです。この関係性の環境づくりに、私自身、教育長として奮闘尽力せねばと思う次第です。

著者プロフィール



● 大沼 吉朗 (おおぬま よしろう)

教職時代は、日本人学校や大規模校、へき地校等に勤務。東日本大震災当時、被災地校の小学校長として移転せずに学校を復興再開。
東北大学大学院卒業。「人間形成における主体性」を生涯の研究テーマにしている。

地域の小学生と交流する大学生 — 学び、遊び、歌い、笑い、 そして涙するとき —

尚綱学院大学教授
田村 嘉勝

学習支援ボランティアサークル「Plum」

「Plum」には発足当時から確たる活動目的がある。その一つには泊を伴った体験学習であり、大学では学ぶことができない学校現場の日常、すなわち小学生の生活、教職員の活動、学校と地域の関係を可能な限り体得しようというものである。歴史の浅いサークルではあるが、しっかりとした合宿での確認事項が記されている。

- 1 宿泊研修について
- 2 研修の流れ（小学校到着時から）
- 3 ミーティングについて
- 4 補足

「2 研修の流れ」では、小学生よりも早く登校し、小学生の下校を確認してから退校する。小学生の学校での1日を観察するには最優先される条件で、職員室でのあいさつ、担任とともに教室へ、授業、業間休み、給食、清掃そして放課後活動とある。宿舎に戻った大学生には夕食後、2時間程度のミーティングがある。1日の各自反省と情報交換、翌日の目標確認がなされる。

年2回の合宿は、心身の疲労を伴うが、最終日に流す彼らの涙はその疲労を払拭し、感涙となり、教師切望をさらに大きくさせる。

この活動は、教育委員会、学校、そして地域に支えられて今日まで続いている。支援提供への報いは、1日も早く教員になることで、大学生はそれを知っている。



宮城県川崎町立川崎小学校との交流

泊を伴った体験学習を、通常合宿と称しているが、

活動は5年前、宮城県登米市立横山小学校から始まった。翌年、近隣の同市立柳津小学校からも誘いを受けた。

川崎小学校との交流は、今年度から始まった。年度当初、本学連携交流課職員とともに川崎町教育長と面談。合宿したいとの性急な依頼を、教育長は即座に了解してくださった。川崎小学校を紹介されたのは間もなくのことで、その後の活動計画作成は早かった。日程は8月22日から24日の2泊3日と決まり、宿泊施設の紹介は町教育委員会、同町及び同校の企画は町を挙げて、地域住民を挙げて案出された。

- | | | |
|-----|-----|------------------------------------------|
| 1日目 | 活動1 | カヌー体験（本町はカヌーの盛んな町。大学生とカヌーの体験に取り組む） |
| | 活動2 | 学び支援（児童への学習支援） |
| | 活動3 | 遊び支援（大学生と一緒に元気に遊ぶ） |
| 2日目 | 活動4 | 調理実習（町保健福祉課ヘルスマイトの指導で、児童と学生とでカレーライスをつくる） |
| | 活動5 | 学生提供プログラム（大学生が考えたプログラムに取り組む） |
| | 活動6 | 遊び支援 |
| 3日目 | 活動7 | 学び支援 |
| | 活動8 | 学生提供プログラム
小学生とのお別れ会
校長先生、若手教員との懇談会 |

この3日間、多忙のさなか教育長は2日、教育委員会職員は毎日足を運ばれた。そして、若手教員町田美桜先生は学級だより「大地の子」号外を「サマースクールセカンド」と題して発刊された。

教えること、教えられること

川崎小学校との交流「サマースクールセカンド」のねらいは次の通りであった。

（児童）大学生との様々な交流体験を通して、豊かな心を育む

（大学）子どもたちとの交流体験を通して、子どもたちとの接し方や教育の在り方を学ぶ

Plum合宿は、普段小学生が大学生と関わることのない地域で実施される。登米市は仙台からは距離があり、川崎町はどちらかと言えば山間の地域である。従って、児童にとっても、大学生にとっても、あまり接点のない者同士の交流ということになる。

こうした地域に行くと、決まって校長がこう発言する。「学生諸君にも勉強になるが、私たち教職員にも勉強になる」と。しかし、一番の感激は、「子どもたちが

大学生と一緒に勉強し、遊んでいる姿だ」という。

学生はよく「児童と同じ目線で」と話す。具体的にはとの質問に回答はどれも難しいようだが、学習支援の難しさはどれもその辺にありそうだ。質問への答えを言うのは比較的安易であるが、どういう表現で、どういうプロセスで説明すると理解してもらえるのかが課題らしい。彼らは大学で「教えること」について講義で、あるいは先輩教師の実践等から学んでいる。しかし、理論と実際とは乖離していて、まずは直接子どもたちに接することが「教えること」の早道で、実践的である。この「教えること」は同時に「教えられること」でもある。子どもたちから学ぶことは多く、合宿のミーティングでその話が出る。そして、情報交換することで個人が抱いた「教えること」と「教えられること」が実は表裏関係にあり、これが合宿参加者に敷衍される。

学生は子どもたちと、現場教職員と、そして地域住民とどうコミュニケーションをとるか。学校現場で校長が頭を抱える一つに、若手教員がクラスの子もだけでなく職場で、また地域で会話ができないというが、もしかすると、学生は早い時期にこの困難に接し、善処する方策を思案することになる。これも泊を伴った合宿の成果となるのか。



今後のゆくえ — Plumはどう進むか —

この度の「教員養成に関する具体的な方向性」の中に（学校インターンシップの導入）が明記されていて、そのために教育委員会、学校、そして大学の円滑な連携を検討する必要があるという。大学が教育委員会に依頼し、学校を紹介してもらう。もちろん学校には学校を支援する地域があって、その地域との関わりを併せて学ぶことになる。

今、そして、これから大学生が学校現場で「学習支援ボランティア」を経験するには、彼ら自身が経験する必要性をまずは理解することが必要で、次に経験するためには学校はもとより、教育委員会、学校、学校を取り巻く地域が大きく関与している現実を知る必要がある。教員を希望する学生が、在学中に学校現場をあらゆる角度から眺め、学校現場入り込み、子どもたちと教職員と関わることによって自身が教員に向いているか否かの判断することが必然である。

Plumの活動は、年2回の泊を伴う合宿がすべて

ではない。毎週一回、発表者を決めて国語の教科書掲載の教材研究を試み、発表している。質疑応答があり、その教材研究を基に、教育実習を終えた上級生が学習指導案を作成し、模擬授業を実施し下級生は参観する。その活動には先輩も後輩もない。

今後の活動は、明確な目的を持ってさらに学校現場に出掛ける必要がある。たくさんの学校現場に赴き、子どもたちと学び、遊び、歌い、笑い、そして涙する、そのような現実に関し、結果、教師の道を選択すればいい。学校現場の教職員から、地域の住民から、時には教育委員会の先生からの叱咤激励もあろう。これらも貴重な選択肢になる。

Plumで多くを体験した学生が、合宿でお世話になった学校に赴き、「4月から私も教壇に立ちます。先生方の仲間になります」と報告ができれば、至上の恩返しとなる。つい先ごろ、Plum合宿で活動した2名の学生が学校に赴き、全教職員の前で挨拶をし、拍手喝采をあびた。校長は、本校で活動を行うと教員になれるんだねとほほえましく話された。そして、校長室に戻った二人に、関わったクラス担任が来て、握手を求められた。

学習ボランティアは確かに教師になるための一手段・方策かもしれない。しかし私は、合宿最終日、全教職員に向かって挨拶をした。「来年も、先生方の前で4月から教員になりますと言える学生を、一人でも多く育てたい。合宿後は大学の責務です。」と。

著者プロフィール



● 田村 嘉勝（たむら よしかつ）

尚絅学院大学総合人間科学部子ども学科教授
神奈川県内の公立小・中・高等学校教諭として勤務。
その後、奥羽大学文学部日本語日本文学教授、非常勤で
福島大学人間発達文化学類、二松学舎大学大学院文学研究科等を経て、
本学子ども学科開設時より教授として着任。専門は、日本近現代文学と国語科教育学。

◆主な著書

- (単著)『井上靖 人と文学』（勉誠出版）
- (共著)『現代日本文学鑑賞講座⑩川端康成』（角川書店）
- 『展望現代の詩歌 詩Ⅲ』（明治書院）
- 『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 1』（右文書院）
- 『文学の力×教材の力 小学校編4年』（教育出版）他

社会教育主事資格を活かした学校経営

～コーディネートの感性～

新潟県阿賀野市立安野小学校 校長 相澤 祐助

これからは、ますます地域と学校の連携が重要となってきます。具体の姿は、協働であり、互いに有益で、無理なく続けることです。その姿に近づくための鍵が、「コーディネートする感性」です。

当校は、私校長、教頭、地域連携担当教職員（6年担任）の3人が、社会教育主事有資格者であり、それぞれが国や県の青少年教育施設の行政を経験しています。

社会教育主事の経験と特性

3人に共通しているのは、行政の経験、すなわち、国や県の予算を元に、事業を企画・運営し、実施後に費用対効果を検証し、次の事業を展開していることです。学校とは違い、広報したり、営業に回ったりしないとお客さんはやって来ません。

そこで大事なものは、ネットワーク、フットワーク、ライフワークです。言い換えると、様々な人や団体とのつながり、いつでも駆け付け、直接顔を付き合わせる事、そして、一回きりではなく、スタイルは変えてもずっとやり続けているか（生涯学習）、という視点です。この3つのワークを身に付け、実践してきたことが社会教育主事としての宝物です。

特に大事なものは、ネットワーク（つながり）です。人と人は容易につながりません。いかに、相手の心をつかみ、自分も一緒にやってみて、ともに喜びを分かち合えるかがたいへん重要です。これがコーディネート力、協働への道筋です。地域や団体には素晴らしい人材がいます。その人材に光を当て、その人が生き甲斐をもって取り組み、その人も地域も元気にできれば最高です。この感性が、社会教育主事の肝となります。この感性を学校現場でも磨き続け、地域と学校が心からつながっていくことが、「社会に開かれた教育課程」「地域とともにある学校づくり」の出発点となります。まさに、今、その姿勢が求められているのです。

コーディネートを学校経営に活かす

安野小学校では、コミュニティ・スクールの前段階として、「安野の子どもを守る会」を組織しました。当初は、子どもの安心・安全のための組織でしたが、学習ボランティアや環境整備の組織として、子どもと積極的にかかわる組織に再編成しています。

平成29年度は、どんな安野の子どもにしたいのか、地域の力を学校に向けることはできないかと熟議を重ねてきました。そして、生活科や総合的な学習の時間に地域人材や地域素材、歴史や文化を導入するための準備が整いました。地域教育プログラムの一例を紹介します。

10月の下旬には、ふるさとdayという日（週休日）を設け、子どもたちが縦割り班で地域のチェックポイントを回ったり、地域の文化（三角だるまづくり）や伝統芸能（太鼓や神楽の舞）にふれたりします。また、日本近代図書館（早稲田大学）の初代館長である市島春城のふるさとでもあるので、春城の業績や今に伝わる功績をじっくりと学んでいます。

地域に誇りをもつ安野の子どもたちを育成し、地域の人たちを元気にするため、これからも社会教育主事の感性を活かしていきます。



著者プロフィール



● 相澤 祐助（あいざわ ゆうすけ）

新潟県阿賀野市立安野小学校 校長
昭和63年4月、新潟大学教育学部を卒業し、新潟県の教員に採用される。平成9年に社会教育主事講習を受講し、資格を有する。平成22年から24年までの3年間、新潟県少年自然の家勤務。平成29年から現職。

教育情報

No.11

日文 教授用資料

平成30年(2018年)3月31日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33394

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690